

# 醜い家鴨の子

DEN GRIMME AELING

ハンス・クリスチャン・アンデルゼン Hans Christian Andersen

青空文庫



それは田舎の夏のいいお天気の日のこと。もう黄金色になった小麦や、まだ青い燕麥や、牧場に積み上げられた乾草堆など、みんなきれいな眺めに見える日でした。こうのとりは長い赤い脚で歩きまわりながら、母親から教わった妙な言葉でお喋りをしていました。

麦畑と牧場とは大きな森に囲まれ、その真ん中が深い水溜りになっています。全く、こういう田舎を散歩するのは愉快な事でした。

その中でも殊に日当りのいい場所に、川近く、氣持のいい古い百姓家が立っていました。そしてその家からずっと水際の辺りまで、大きな牛蒡の葉が茂っているのです。それは実際ずいぶん丈が高くて、その一番高いなどは、下に子供がそっくり隠れる事が出来るくらいでした。人がまるで無くて、全く深い林の中みたいです。この工合のいい隠れ場に一羽の家鴨がその時巢について卵がかえるのを守っていました。けれども、もうだいたい時間が経っているのに卵はいっこう殻の破れる気配もありませんし、訪ねてくる仲間もあまりないので、この家鴨は、そろそろ退屈しかけて来ました。他の家鴨達は、こんな、足の滑りそうな土堤を上って、牛蒡の葉の下に坐って、この親家鴨と

お喋りするより、川で泳ぎ廻る方がよっぽど面白いのです。

しかし、とうとうやつと一つ、殻が裂け、それから続いて、他のも割れてきて、めいめの卵から、一羽ずつ生き物が出て来ました。そして小さな頭をあげて、

「ピーピー。」

と、鳴くのでした。

「グワツ、グワツっておしい。」

と、母親が教えました。するとみんな一生懸命、グワツ、グワツと真似をして、それから、あたりの青い大きな葉を見廻すのでした。

「まあ、世界つてずいぶん広いもんだねえ。」

と、子家鴨達は、今まで卵の殻に住んでいた時よりも、あたりがぐつとひろびろしているのを見て驚いて言いました。すると母親は、

「何だね、お前達これだけが全世界だと思ってるのかい。まあそんな事はあつちのお庭を見てからお言いよ。何しろ牧師さんの畑の方まで続いてるって事だからね。だが、私だつてまだそんな先きの方まで行った事がないがね。では、もうみんな揃つたらうね。」

「おや！ 一番大きいのがまだ割れないでるよ。まあ一体いつまで待たせるんだらうねえ、飽き飽きしちまった。」

そう言つて、それでもまた母親は巢に坐りなおしたのでした。

「今日は。御子様はどうかね。」

そう言いながら年とつた家鴨がやつて来ました。

「今ねえ、あと一つの卵がまだかえらないんですよ。」

と、親家鴨は答えました。

「でもまあ他の子達を見てやつて下さい。ずいぶんきりよう好しばかりでしょう？ みんな

あ父親そつくりじやありませんか。不親切で、ちつとも私達を見に帰つて来ない

父親ですがね。」

するとおばあさん家鴨が、

「どれ私にその割れない卵を見せて御覧。きつとそりや七面鳥の卵だよ。私もいつか

頼まれてそんなのをかえした事があるけど、出て来た子達はみんな、どんなに気を揉んで

直そうとしても、どうしても水を恐がつて仕方がなかった。私あ、うんとガアガア言つて

やったけど、からつきし駄目！ 何としても水に入れさせる事が出来ないのさ。まあもつ

とよく見せてき、うん、うん、こりやあ間違いなし、七面鳥の卵だよ。悪いことは言わないから、そこに放つたらかしときなさい。それで早く他の子達に泳ぎでも教えた方がいいよ。」

「でもまあも少しの間ここで温めていようと思えますよ。」

と、母親は言いました。

「こんなにもう今まで長く温めたんですから、も少し我慢するのは何でもありません。」

「そんなら御勝手に。」

そう言い棄てて年寄の家鴨は行ってしまいました。

とうとう、そのうち大きい卵が割れてきました。そして、

「ピーピー。」

と鳴きながら、雛鳥が匍い出してきました。それはばかに大きくて、ぶきりようでした。

母鳥はじつとその子を見つめていましたが、突然、

「まあこの子の大きい事！　そしてほかの子とちつとも似てないじゃないか！　こりやあ、ひよつとすると七面鳥かも知れないよ。でも、水に入れる段になりや、すぐ見分けがつくから構やしない。」

と、ひとりごと 独言を言いました。

翌ある日ひもいよいよお天気てんきで、お日ひ様が青あおい牛蒡ごぼうの葉はにきらきら射さしてきました。そこで母ははど鳥りは子供こども達たちをぞろぞろ水みず際ぎわに連つれて来きて、ポシヤンと跳とび込こみました。そして、グワツ、グワツと鳴ないてみせました。すると小ちいさい者もの達たちも真ま似ねして次つぎ々つぎに跳とび込こむのでした。みんないったん水みずの中なかに頭あたまがかくれましたが、見みる間まにまた出でて来きます。そしていかに易やす々やすと脚あしの下したに水みずを掻かき分わけて、見み事に泳およぎ廻まわるのでした。そしてあのぶきりよこうな子こ家あひる鴨もみんなと一いっ緒しょに水みずに入いり、一いっ緒しょに泳およいでいました。

「ああ、やつぱり七しち面めん鳥ちようじゃなかつたんだ。」

と、母はは親おやは言いいました。

「まあ何なんて上じよう手ずに脚あしを使つかう事ことつたら！ それにからだもちやんと真まっ直すぐに立たててるしさ。ありや間ま違ちがいなしに私あたしの子こさ。よく見みりや、あれだつてまんざら、そう見みつともなくないんだ。グワツ、グワツ、さあみんな私わたしに従ついてお出いで。これから偉えらい方かた々がたのお仲なか間ま入いりをさせなくちや。だからお百ひやく姓しやうさんの裏に庭わの方かた々がたに紹しやう介かいするからね。でもよく気きをつけて私わたしの傍そばを離はなれちやいけないよ。踏ふまれるから。それに何なにより第だい一いちに猫ねこを用心ようじんするんだよ。」

さて一同で裏庭に着いてみますと、そこでは今、大騒ぎの真つ最中です。二つ  
の家族で、一つの鰻の頭を奪いあつているのです。そして結局、それは猫にさらわれ  
てしまいました。

「みんな御覧、世間はみんなこんな風なんだよ。」

と、母親は言つて聞かせました。自分でもその鰻の頭が欲しかったと見えて、嘴を磨り  
つけながら、そして、

「さあみんな、脚に気をつけて。それで、行儀正しくやるんだよ。ほら、あつちに見え  
る年とつた家鴨さんに上手にお辞儀おし。あの方は誰よりも生れがよくてスペイン種な  
のさ。だからいい暮しをしておいでなのだ。ほらね、あの方は脚に赤いきれを結えつけて  
おいでだろう。ありやあ家鴨にとつちやあ大した名誉なんだよ。つまりあの方を見失わな  
い様にしてみんなが気を配つてる証拠なの。さあさ、そんなに趾を内側に曲げないで。  
育ちのいい家鴨の子はそのお父さんやお母さんみたいに、ほら、こう足を広くはなしてひ  
ろげるもんなのだ。さ、頸を曲げて、グワツつて言つて御覧。」

家鴨の子達は言われた通りにしました。けれどもほかの家鴨達は、じろつとそつちを  
見て、こう言うのでした。



「ふん、また一瞬り、他の組がやって来たよ、まるで私達じゃまだ足りないか何その様にさ！ それにまあ、あの中の一羽は何て妙ちきりんな顔をしてるんだらう。あんなのここにに入れてやるもんか。」

そう言ったと思うと、突然一羽跳び出して来て、その頸のところを噛んだのでした。「何をなさるんです。」

と、母親はどなりました。

「これは何にも悪い事をした覚えなんか無いじゃありませんか。」

「そうさ。だけどあんまり図体が大き過ぎて、見つともない面してるからよ。」  
と、意地悪の家鴨が言い返すのでした。

「だから追い出しちまわなきゃ。」

すると傍から、例の赤いきれを脚につけている年寄家鴨が、

「他の子供さんはずいみんみんなきりよう好しだねえ、あの一羽の他は、みんなね。お母さんがあれだけ、もう少しどうか善くしたらよきそうなもんだのに。」

と、口を出しました。

「それはとても及びませぬ事で、奥方様。」

と、母親は答えました。

「あれは全くのところ、きりよう好しではございません。しかし誠に善い性質をもっており、泳ぎをさせますと、他の子達くらい、——いやそれよりずっと上手に致します。私の考えますところではあれも日が経ちますにつれて、美しくなりたぶんからだも小さくなる事でございましょう。あれは卵の中にあまり長く入っておりましたせいで、からだつきが普通に出来上がらなかつたのでございます。」

そう言つて母親は子家鴨の頸を撫で、羽を滑かに平らにしてやりました。そして、「何しろこりや男だもの、きりようなんか大した事じゃないさ。今に強くなつて、しっかりと自分の身をまもる様になる。」

こんな風に呟いてもみるのでした。

「実際、他の子供衆は立派だよ。」

と、例の自分のいい家鴨はもう一度繰返して、

「まずまず、お前さん方もつとからだをらくになさい。そしてね、鰻の頭を見つけたら、私のところに持つて来ておくれ。」

と、附け足したものです。

そこでみんなはくつろいで、気の向いた様にふるまいました。けれども、あの一ばんおしまいに殻からから出でた、そしてぶきりような顔付かおつきの子家鴨こあひるは、他ほかの家鴨あひるやら、その他たそこにかわられている鳥達とりたちみんなからまで、噛かみつかれたり、突つきのめされたり、いろいろからかわれたのでした。そしてこんな有様ありさまはそれから毎日まいにちつづ続いたばかりでなく、日に増ましそれがひどくなるのでした。兄きょうだい弟まいまでこの哀あわれな子家鴨こあひるに無慈悲むじひに辛つらく当あたつて、

「ほんとに見みつともない奴やつ、猫ねこにでもとつ捕つかまった方がほういいや。」

などと、いつも悪あく体たいをつくののです。母親ははおやさえ、しまいには、ああこんな子こなら生うまれない方がほうよっぽど幸しあだつたと思おもう様ようになりました。仲間なかまの家鴨あひるからは突つかれ、鶏ひよ子こからは羽はでぶたれ、裏庭うらにわの鳥達とりたちに食物たべものを持もつて来る娘むすめからは足あしで蹴けられるのです。

堪たまりかねてその子家鴨こあひるは自分じぶんの棲家すみかをとび出だしてしまいました。その途とち中ゆう、柵さくを越こえる時とき、垣かきの内うちにいた小鳥こどりがびつくりして飛とび立たつたものですから、

「ああみんなは僕の顔かおがあんまり変へんなもんだから、それで僕ぼくを怖こわがつたんだな。」  
と、思おもいました。それで彼かれは目めを瞑つぶつて、なおも遠とほく飛とんで行いきますと、そのうち広ひろい広ひろい沢地たくちの上うえに来きました。見みるとたくさんの野鴨のがもが住すんでいます。子家鴨こあひるは疲つかれと悲かなしみになやまされながらここで一ひと晩ばんを明あかしました。

朝あさになつて野鴨のがもたち達は起きてみますと、見み知らない者ものが来きているので目めをみはりました。  
「一い体たい君きみはどういう種しゆるい類かの鴨かもなのかね。」

そう言いつて子家鴨こあひるの周まわりに集あつまつて来きました。子家鴨こあひるはみんなに頭あたまを下さげ、出で来きるだけ  
恭うやうやしい様よう子すをしてみせましたが、そう訊たずねられた事ことに対しては返へん答とうが出で来きませんでした。  
野鴨のがもたち達は彼かれに向むかつて、

「君きみはずいぶんみつともない顔かおをしてるんだねえ。」

と、云いい、

「だがね、君きみが僕ぼく達たちの仲なか間まをお嫁よめにくれつて言いいさえしなけりや、まあ君きみの顔かおつきくら  
いどんなだつて、こつちは構かまわないよ。」

と、つけ足たしました。

可かわ哀いそうに！ この子家鴨こあひるがどうしてお嫁よめさんを買もらう事ことなど考かんえていたでしょう。彼かれは  
ただ、蒲がまの中なかに寝ねて、沢たくち地ちの水みずを飲のむのを許ゆるされればたくさんだったのです。こうして二ふ  
日つかばかりこの沢たくち地ちで暮くらしていますと、そこに二わ羽わの雁がんがやつて来きました。それはまだ卵たまごか  
ら出でて幾いくらも日ひの経たたない子雁こがんで、大たいそうこましゃくれ者ものでしたが、その一い方ほうが子家鴨こあひる  
に向むかつて言いうのに、

「君、ちよつと聴き給え。君はずいぶん見つともないね。だから僕達は君が気に入つちまつたよ。君も僕達と一緒に渡り鳥にならないかい。ここからそう遠くない処にまだほかの沢地があるがね、そこにやまだ嫁かない雁の娘がいるから、君もお嫁さんを貰うといいや。君は見つともないけど、運はいいかもしれないよ。」

そんなお喋りをしていきますと、突然空中でポンポンと音がして、二羽の雁は傷ついで水草の間に落ちて死に、あたりの水は血で赤く染りました。

ポンポン、その音は遠くで涯しなくこだまして、たくさんの雁の群は一せいに蒲の中から飛び立ちました。音はなおも四方八方から絶え間なしに響いて来ます。狩人がこの

沢地をとり囲んだのです。中には木の枝に腰かけて、上から水草を覗くのもありました。猟銃から出る青い煙は、暗い木の上を雲の様に立ちのぼりました。そしてそれが水

上を渡つて向うへ消えたと思うと、幾匹かの猟犬が水草の中に跳び込んで来て、草を踏み折り踏み折り進んで行きました。可哀そうな子家鴨がどれだけびつくりしたか！

彼が羽の下に頭を隠そうとした時、一匹の大きな、怖ろしい犬がすぐ傍を通りました。

その顎を大きく開き、舌をだらりと出し、目はきらきら光らせているのです。そして鋭い歯をむき出しながら子家鴨のそばに鼻を突つ込んでみた揚句、それでも彼には触らずにど

ぶんと水の中に跳び込んでしまいました。

「やれやれ。」

と、子家鴨は吐息をついて、

「僕は見つともなくて全く有難い事だった。犬さえ噛みつかないんだからねえ。」

と、思いました。そしてまだじつとしていますと、猫はなおその頭の上ではげしく続いて、銃の音が水草を通して響きわたるのでした。あたりがすっかり静まりきつたのは、

もうその日もだいぶん晩くなつてからでしたが、そうなつてもまだ哀れな子家鴨は動こうとしませんでした。何時間かじつと坐つて様子を見ていましたが、それからあたりを丁寧にもう一遍見廻した後やつと立ち上つて、今度は非常な速さで逃げ出しました。畑を越え、牧場を越えて走つて行くうち、あたりは暴風雨になつて来て、子家鴨の力では、凌いで行けそうもない様子になりました。やがて日暮れ方彼は見すばらしい小屋の前に来ましたが、それは今にも倒れそうで、ただ、どっち側に倒れようかと迷っているためにばかりまだ倒れずに立っている様な家でした。あらしはますますつのる一方で、子家鴨にはもう一足も行けそうもなくなりました。そこで彼は小屋の前に坐りましたが、見ると、戸の蝶番が一つなくなつていて、そのために戸がきつちり閉つていません。下

の方でちようど子家鴨がやつと身を滑り込ませられるくらい透いでいるので、子家鴨は静かにそこからしのび入り、その晩はそこで暴風雨を避ける事にしました。

この小屋には、一人の女と、一匹の牡猫と、一羽の牝鶏とが住んでいるのでした。猫はこの女御主人から、

「悴や。」

と、呼ばれ、大の御ひいき者でした。それは背中をぐいと高くしたり、喉をごろごろ鳴らしたり逆に撫でられると毛から火の子を出す事まで出来ました。牝鶏はというと、足がばかに短いので

「ちんちくりん。」

と、いう綽名を貰っていましたが、いい卵を生むので、これも女御主人から娘の様に可愛がられているのでした。

さて朝になって、ゆうべ入って来た妙な訪問者はすぐ猫達に見つけられてしまいました。猫はごろごろ喉を鳴らし、牝鶏はクツクツ鳴きたてはじめました。

「何だねえ、その騒ぎは。」

と、お婆さんは部屋中見廻して言いましたが、目がぼんやりしているものですから、子

家鴨あひるに気がついた時とき、それを、どこかの家うちから迷まよつて来たき、よくふとつた家鴨あひるだと思おもつてしましまいました。

「いいものが来たきぞ。」

と、お婆ばあさんは云いいました。

「牡家鴨おあひるでさえなけりやいいんだがねえ、そうすりや家鴨あひるの卵たまごが手てに入はいるといふもんだ。まあ様子ようすを見みてやろう。」

そこで子家鴨こあひるは試ためしに三週しゅうかん間まばかりそこに住すむ事を許ゆるされましたが、卵たまごなんか一ひとつだつて、生うまれる訳わけはありませんでした。

この家うちでは猫ねこが主人しゅじんの様ようにふるまい、牝めんどり鶏とりが主人しゅじんの様ように威張いばっています。そして何なにかというと

「我われわれ々々この世界せかい。」

と、言いうのでした。それは自分達じぶんたちが世界せかいの半分はんぶんずつだと思おもっているからなのです。あ

る日牝ひめんどり鶏とりは子家鴨こあひるに向むかつて、

「お前まえさん、卵たまごが生うめるかね。」

と、尋たずねました。



「いいえ。」

「それじゃ何にも口出しなんかする資格はないねえ。」

牝鶏はそう云うのでした。今度は猫の方が、

「お前さん、背中を高くしたり、喉をごろつかせたり、火の子を出したり出来るかい。」  
と、訊きます。

「いいえ。」

「それじゃ我々偉い方々が何かものを言う時でも意見を出しちやいけないぜ。」

こんな風に言われて子家鴨はひとりで滅入りながら部屋の隅っこに小さくなっています。そのうち、温い日の光や、そよ風が戸の隙間から毎日入る様になり、そうなる、子家鴨はもう水の上を泳ぎたくて泳ぎたくて堪らない気持が湧き出して来て、とうとう牝鶏にうちあけてしまいました。すると、

「ばかな事をおいいでないよ。」

と、牝鶏は一口にけなしつけるのでした。

「お前さん、ほかにする事がないもんだから、ばかげた空想ばっかしする様になるのさ。もし、喉を鳴したり、卵を生んだり出来れば、そんな考えはすぐ通り過ぎちまうんだがね

「でも水の上を泳ぎ廻るの、実際愉快なんですよ。」  
と、子家鴨は言いかえしました。

「まあ水の中にくぐつてごらんなさい、頭の上に水が当る気持ちのよさったら！」

「気持ちいいだつて！ まあお前さん気でも違つたのかい、誰よりも賢いこの猫さんにも、女御主人にでも訊いてごらんよ、水の中を泳いだり、頭の上を水が通るのがいい気持ちだなんておっしゃるかどうか。」

牝鶏は躍気になつてそう言うのでした。子家鴨は、

「あなたにや僕の気持ちが分らないんだ。」

と、答えました。

「分らないだつて？ まあ、そんなばかげた事は考えない方がいいよ。お前さんここに居れば、温かい部屋はあるし、私達からはいろんな事がならえるというもの。私はお前さんのためを思つてそう言つて上げるんだがね。とにかく、まあ出来るだけ速く卵を生む事や、喉を鳴す事を覚える様におし。」

「いや、僕はもうどうしてもまた外の世界に出なくちゃいられない。」

「そんなら勝手にするがいいよ。」

そこで子家鴨は小屋を出て行きましました。そしてまもなく、泳いだり、潜ったり出来る様な水の辺りに来ましたが、その醜い顔容のために相変らず、他の者達から邪魔にされ、はねつけられてしまいました。そのうち秋が来て、森の木の葉はオレンジ色や黄金色に変わって来ました。そして、だんだん冬が近づいて、それが散ると、寒い風がその落葉をつかまえて冷い空中に捲き上げるのでした。霰や雪をもよおす雲は空に低くかかり、大鳥は羊齒の上に立って、

「カオカオ。」

と、鳴いています。それは、一目見るだけで寒さに震え上つてしまいそうな様子でした。目に入るものみんな、何もかも、子家鴨にとつては悲しい思いを増すばかりです。

ある夕方方の事でした。ちようどお日様が今、きらきらする雲の間に隠れた後、水草の中から、それはそれはきれいな鳥のたくさんの群が飛び立って来しました。子家鴨は今までにそんな鳥を全く見た事がありませんでした。それは白鳥という鳥で、みんな眩いほど白く羽を輝かせながら、その恰好のいい首を曲げたりしています。そして彼等は、その立派な翼を張り拡げて、この寒い国からもつと暖い国へと海を渡つて飛んで行く時は、

みんな不思議な声で鳴くのでした。子家鴨はみんなが連れだつて、空高くだんだんと昇つて行くのを一心に見ているうち、奇妙な心持で胸がいつぱいになってきました。それは思わず自分の身を車か何その様に水の中に投げかけ、飛んで行くみんなの方に向つて首をさし伸べ、大きな声で叫びますと、それは我ながらびつくりしたほど奇妙な声が出たのでした。ああ子家鴨にとつて、どうしてこんなに美しく、仕合せらしい鳥の事が忘れる事が出来たでしょう！ こうしてとうとうみんなの姿が全く見えなくなると、子家鴨は水の中にぼつくり潜り込みました。そしてまた再び浮き上つて来ましたが、今はもう、さつきの鳥の不思議な気持にすっかりとらわれて、我を忘れるくらいです。それは、さつきの鳥の名も知らなければ、どこへ飛んで行ったのかも知りませんでしたけれど、生れてから今までに会つたどの鳥に対しても感じた事のない気持を感じさせられたのでした。子家鴨はあのきれいな鳥達を嫉ましく思ったのではありませんでしたけれども、自分もあんなに可愛らしかつたらなあとは、しきりに考えました。可哀そうにこの子家鴨だつて、もとの家鴨達が少し元氣をつける様にしてさえくれれば、どんなに喜んでみんなと一緒で暮らしたでしょうに！

さて、寒さは日々にひどくなつて来ました。子家鴨は水が凍つてしまわない様にと、し

よつちゆう、その上を泳ぎ廻つていなければなりませんでした。けれども夜毎々々に、それが泳げる場所は狭くなる一方でした。そして、とうとうそれは固く固く凍つてきて、子家鴨が動くときの水の中の氷がめりめり割れる様になつたので、子家鴨は、すっかりその場所が氷で、閉ざされてしまわない様力限り脚で水をばちやばちや掻いていなければなりませんでした。そのうちしかしもう全く疲れきつてしまい、どうする事も出来ずにぐったりと水の中で凍えてきました。

が、翌朝早く、一人の百姓がそこを通りかかつて、この事を見つけたのでした。彼は穿いていた木靴で氷を割り、子家鴨を連れて、妻のところへ帰つて来ました。温まつてくるとこの可哀そうな生き物は息を吹きかえして来ました。けれども子供達がそれと一緒いっしょに遊ぼうとしかけると、子家鴨は、みんながまた何か自分にいたずらをするのだとおもひ込んで、びっくりして跳び立つて、ミルクの入つていたお鍋にとび込んでしまいました。それであたりはミルクだらけという始末。おかみさんが思わず手を叩くと、それはなおびつくりして、今度はバタの桶やら粉桶やらに脚を突つ込んで、また匍匐は出しました。さあ大変な騒ぎです。おかみさんはきいきい言つて、火箸でぶとうとするし、子供達もわいわい燥いで、捕えようとするはずみにお互いにぶつかつて転んだりしてしまいました。

た。けれども幸いに子家鴨はうまく逃げおおせました。開いていた戸の間から出て、やつと叢の中まで辿り着いたのです。そして新たに降り積った雪の上に全く疲れた身を横たえたのでした。

この子家鴨が苦しい冬の間に遭遇した様々な難儀をすっかりお話しした日には、それは、あつたとき、ある朝、子家鴨は自分が沢地の蒲の中に倒れているのに気がついたのでした。それは、お日様が温く照っているのを見たり、雲雀の歌を聞いたりして、もうあたりがすっかりきれいな春になって知っているのを知りました。するとこの若い鳥は翼で横腹を搏つてみましたが、それは全くしつかりしていて、彼は空高く昇りはじめました。そしてこの翼はどんどん彼を前へ前へと進めてくれます。で、とうとう、まだ彼が無我夢中である間に大きな庭の中に来てしまいました。林檎の木は今いつぱいの花ざかり、香わしい接骨木はビロードの様な芝生の周りを流れる小川の上にその長い緑の枝を垂れています。何もかも、春の初めのみずみずしい色できれいな眺めです。このとき、近くの水草の茂みから三羽の美しい白鳥が、羽をそよがせながら、滑らかな水の上を軽く泳いであらわれて来たのでした。子家鴨はいつかのあの可愛らしい鳥を思い出しました。そしていつかの日よりもっと悲し

い気持きもちになつてしまいました。

「いつそ僕ぼく、あの立派りっぱな鳥とりんとこに飛とんでつてやろうや。」  
と、彼かれは叫さけびました。

「そうすりやあいつ等は、僕ぼくがこんなにもつともない癖くせして自分達じぶんたちの傍そばに来くるなんて失し敬つげいだつて僕ぼくを殺ころすにちがいない。だけど、その方ほうがいいんだ。家鴨あひるの嘴くちばしで突つかれたり、牝めんどり鶏どりの羽はねでぶたれたり、鳥とり番ばんの女おんなの子こに追おいかけられるなんかより、どんなにいいかしれやしない。」

こう思おもつたのです。そこで、子家鴨こあひるは急きゆうに水すい面めんに飛とび下おり、美うつくしい白はく鳥ちようの方ほうに、泳およいで行いきました。すると、向むうでは、この新あたらしくやつて来きた者ものをちらつと見みると、すぐ翼つばさを拈ひろげて急いそいで近ちかづいて来きました。

「さあ殺ころしてくれ。」

と、可哀かわいそうな鳥とりは言いつて頭あたまを水みずの上うへに垂たれ、じつと殺ころされるのを待まち構かまえました。

が、その時とき、鳥とりが自分じぶんのすぐ下したに澄すんでいる水みずの中なかに見みつけたものは何なんでしたらう。それこそ自分じぶんの姿すがたではありませんか。けれどもそれがどうでしょう、もう決けつして今いまはあのかくすぶつた灰はい色いろの、見みるのも厭いやになる様ような前まえの姿すがたではないのです。いかにも上じよう品ひんで美うつく

しい白鳥なのです。百姓家の裏庭で、家鴨の巢の中に生れようとも、それが白鳥の卵から孵る以上、鳥の生れつきには何のかわりもないのでした。で、その白鳥は、今となつてみると、今まで悲しみや苦しみにさんざん出遭つた事が喜ばしい事だつたという気持ちにもなるのでした。そのためにかえつて今自分とり囲んでいる幸福を人一倍楽しむ事が出来るからです。御覧なさい。今、この新しく入つて来た仲間を歓迎するしるしに、立派な白鳥達がみんな寄つて、めいめいの嘴でその頸を撫でているではありませんか。

幾人かの子供がお庭に入つて来ました。そして水にパンやお菓子を投げ入れました。

「やつー！」

と、一番小さい子が突然大声を出しました。そして、

「新しく、ちがったのが来てるぜ。」

そう教えたものでしたら、みんなは大喜びで、お父さんやお母さんのところへ、雀躍しながら馳けて行きました。

「ちがった白鳥がいまーす、新しいのが来たんでーす。」

口々にそんな事を叫んで。それからみんなもつとたくさんのパンやお菓子を貰つて来て、



水みずに投げ入れなました。そして、

「新あたらしいのが一いっとう等ときれいだね、若わかくてほんといいいね。」

と、賞ほめそやすのでした。それで年としの大きい白はくちよう鳥たち達まで、この新あたらしい仲なか間の前まえでお辞じ儀ぎをしました。若わかい白はくちよう鳥はもうままったく気きまりが悪わるくななって、翼つばの下したに頭あたまを隠かくしてしままいました。彼かれには一いったい体たいどうしていいのわかか分わらななかつたのです。ただ、ここうう幸こう福ふくな気き持もちでいいっぱいで、けれども、高こう慢まんな心こころなどは塵ちりほども起おこしませんでした。

見みつともないという理り由ゆうで馬ば鹿かにされた彼かれ、それが今いまはどの鳥とりよりも美うつくしいと云いわれていいるのではありませせんか。接に骨わ木こまでが、その枝えだをこの新あたらしい白はくちよう鳥はの方ほうに垂たらし、頭あたまの上うへではお日ひ様さまが輝かがかしく照てりわたたつていまいます。新あたらしい白はくちよう鳥は羽はねをさらさら鳴ならし、細ほつそりした頸くびを曲まげて、心こころの底そこから、

「ああ僕ぼくはあの見みつともない家あひる鴨だつた時とき、実じ際さいこんな仕し合あわせなんなか夢ゆめにも思おもわなかつたなあ。」

と、叫さけぶのでした。



# 青空文庫情報

底本：「小學生全集第五卷 アンデルゼン童話集」興文社、文藝春秋社

1928（昭和3）年8月1日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、次の書き換えを行いました。

「或↓ある 余り↓あまり 一向↓いつこう 一旦↓いったん 中↓うち 彼↓か 却つて↓かえつて かも知れない↓かもしれない 位↓くらい 此処↓ここ 此の↓この 随分↓ずいぶん 直ぐ↓すぐ 其処↓そこ 其・其の↓その 其中↓そのうち 大分↓だいぶ・だいぶん 沢山↓たくさん 唯↓ただ 多分↓たぶん 為↓ため 段々↓だんだん 丁度↓ちようど 一寸↓ちよつと て居る↓ておる 何↓ど 何処↓どこ 兎に角↓とにかく 程↓ほど 益々↓ますます 又↓また 迄↓まで 間もなく↓まもなく 余つぽど↓よつぽど」

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 醜い家鴨の子

## DEN GRIMME AELING

2020年 7月17日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 ハンス・クリスチャン・アンデルゼン Hans Christian Andersen

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>